

竹本綾之助

長谷川時雨

青空文庫

泰平三百年の徳川幕府の時代ほど、義理人情というものを道德の第一においていたことはない。忠の一字をにおいては何事にも義理で処決した。武家にあつては武士道の義理、市井の人には世間の義理である。義理のためには親子の間の愛情も、恋人同士の進（ほ）しめるような愛の奔流も抑圧してきた時代である。その人情の極致と破綻（はたん）と、抑（おさ）えつけられた胸の炎と、機微な、人間の道の錯誤を語りだしたのが義太夫節（ぎだゆうぶし）で、義太夫節は徳川時代でなければ、産れないもので他の時には出来ないものだ。というのは、武士道からきた道德と、儒教からきた道德と、東洋の宗教が教えた輪廻説（りんねせつ）の諦（あきら）めとが、一つの纏（まと）められた思想が、その語りものの経（たて）の太い線になつている。その上に、義太夫節の生れた徳川氏の政府の最初に近い年代は、一面に長らく続いた戦国の殺伐で豪放な影がありながら、一面には世の中が何時（いつ）も春の花の咲いているような、黄金が途（みち）上（た）にもぎくぎく零（こぼ）れていれば、掘井戸のなかから湧（わ）いて出るといったような、豪華な放（ほう）縦（じゆう）な、人心の頹（たい）廢（はい）しかけた影も射（さ）しそめていた。その上に人斬（ひとぎり）り刀（がたな）を横（よこ）たえて武士は市民の上に立ち、金はあつても町人は、おなじ大空の月さえ遠慮（えんりょ）して見なくてはならないほど頭（かぶ）があがらなかつた。その時勢に、新江戸の土くさい田舎（いなか）ものずぶとさと反撥（はんぱつ）力（りきよく）をもつた、新開の土地などでは見られな

い現象を、古い伝統をもつ大都会、浪花の大阪の土地に見たのは当然の事であつたらう。

経済都市大阪のぼんちちは、酒と女の巷へ、やりどころのない我儘と、頭の廻らしようのない鬱憤を、放埒な心に育てて派手な場処へと、豪華を競いに行ったが、家にかえれば道徳の人情責めと、いわゆる世間の義理とが、小むずかしく、光った頭のちよん鬪と、背中を丸くして目を摺り赤めた老婆の涙が代表して待構えていた。そしてぼんちは強い刺戟に爛れた魂を、柔かい女の胸の中に、墓場に探ねあてて死んでいった。

そうした義理人情の葛藤と、武家の義理立ての悲劇を語りものにしたのが義太夫である。であるから、節であり、絃奏をもつたものでありながら、義太夫は他の歌とはちがつて唄うものではない、語りものである。現われる人物の個性を、苦悩を語り訴えるのである。

竹本義太夫がその浄瑠璃節の創造主であるゆえに義太夫と唱え世に広まった。またその当時人形操りには辰松八郎兵衛、吉田三郎兵衛などが盛名を博し、不世出の大文豪、我國の沙翁と呼ばれる近松門左衛門が、作者として名作を惜気もなく与え、義太夫に語らせ、人形操りの舞台にかけさせた。そして近松翁が取りあつかった取材は、その多くを當時の市井の出来ごとから受入れている。そうして義太夫節は大阪に生れ、大阪に成長し、

語る人も阪地はんちの生れを本場とし、修業もその土地を本磨きとするのである。

わが竹本綾之助たけもとあやのすけ、その女もその約束ひとをもつて、しかも天才麒麟児きりんじとして、その上に美

貌ぼうをもつて生れた。私は綾之助を幸福者だと思ふ。何故なぜそういうかといえ、綾之助の現

今は三人の娘の母親として、夫には長い年月の間も、最初にかわらぬ恋人として、家庭の

中軸なかじくとなつてゐる。三人の娘は、さだ子、いと子、ふじ子とよんで、母の美しさと父の

秀ひいでたところをとつて生れた。姉は高女をこの三月に卒業し、中のいと子は実科女学校に

学ばせてゐる。綾之助は芸にも自家じかの見けんを立ててゐるように、子女の教育の上にも一家の

見識を持つてゐる。娘たちの長所短所を見分けて、学ぶところを選ませている。家庭では、

女中のする仕事をわけてさせ、娘たちを一人前の婦人とすることに腐心してゐる。それは

彼女が、彼女のあの名高かつた盛時の芸名を、美しい娘の三人をも持ちながら、どの子に

も伝えようとしなのにも、操持そうじの-highいことが窺うかがわれる。彼女にはそうした満足と誇りが

あり、そして家庭は、彼女の収入を煩らわさないでも、子供を教育していかれるだけの夫

をもつてゐる。それは女芸人とよばれる仲間ではめずらしいことなのだ。今年ことし——大正七

年に彼女は四十四歳になるが、この上の平和と幸福とは重なるうとも、彼女の身辺に冷た

い風の逼せまろうはずはない。私が彼女は幸福だといつても、錯あやまつた事ではなからうと思ふ。

彼女には上なき誇りがも一つある。それは童貞同士の恋人で、初恋の夫妻であるという、これも芸の人にはめずらしいことといわなければならぬ。三人の母の彼女の至上の宝は夫であり、彼女の夫の無上の満足は妻としての彼女を持つことだが、そのためには幾人かの犠牲者に、同情するひまも、一滴の涙もこぼしてやる余裕もなかった。俊敏な綾之助は、盛名を保つに聡さとしかつたであろうが、綾之助を情にもろくまけない女に教育したのは、七歳の年から無心で語っていた義太夫節が、知らず知らずの間に教えた強いものが、綾之助の心の底に生れつきのように根をはっていたのでもあろうと考える。

大阪南区置屋町に鏝かざりや屋げんべえの源兵衛という人があつた。その人の父親は、石山新蔵という、大阪の江戸堀蔵屋敷くろやしきづめ詰の武家であつたが、源兵衛は持つて生れた氣負はだい肌いが、侍をやめて、維新の新政を幸いに気軽に職人になつてしまつたのだつた。大酒家たいしゆかではあり、居いそ候ろうは先方がいるなり次第に置きほうだいであつたその人の、綾之助は三女に生れ、本名はお園さんである。

源兵衛の妹のお勝さんという伯母おばさんが、お園を貰もらつて育て、後年の綾之助に仕立て、自分は三味線ひきになつて鶴勝つるかと名乗り、綾之助の今日ある基礎をつくつたのであつた。

嬪やもめのお勝も源兵衛の妹だけあつて気性の勝つた人で、お園が男のように竹馬に乗つたりして遊ぶのを叱言こいごともいわずに、五分刈ぶぶんの男姿にしておいた。町内の者がお園のことを男おんなと呼ぶのを、知つていても知らぬ顔をしていた。

新町の畳屋の近所に男義太夫の新助というのがあつた。お園が七ツのおりにその新助が「由良の港の山別れ」を教えた。ある折、一段語りおえて、親たちを嬉しがらせたあとで、「御褒美ごほうびのかわりにお酒が飲みたい」

といつて、七歳のおそのやんが生一本ききの灘なだの銘酒を五合ばかり飲んで、親たちや養母を驚かせたりした。

新町のある茶屋に、素人しろうと義太夫の稽古会けいこがあつた。素人といつても、咽喉のどからして義太夫そのものに合つた音声を持つ土地ではあり、ことに土地で生れた芸ではあり、父祖代々、耳に親しんできた馴染なじみの深い、鍛錬のある人たちのあつまりのこととて、到底よその土地の旦那芸とは一つにならない人たちのあつまりであると同時に、こればかりは、何処どこでもかわらない自慢天狗てんぐの旦那芸の集りであつた。後見役こうけんやくには師匠筋の太夫、三味線弾ひきが揃そろつて、御簾みすが上るたびに後幕うしろまくが代る、見台けんたいには金紋が輝く、湯呑ゆのみが取りかわる。着附きつけにも肩衣かたぎぬにも贅ぜいを尽して、一段ごとに喝采かつさいを催促した。其処そこへ平日着ふだんぎのまま

飛込んだのが、町内の腕白者男おんなで通るお園であった。自分も一段語りたいたった。人々は面白がって子供にからかつて、

「そんなに仲間入りがしたければ、三味線弾きをつれておいで」

といった。お園は早速四辺あたを見廻して、一人の師匠を指さした。その人はにこにこして

「鈴が森」を弾いてくれたが、それは誰であろう当時の名人竹本住太夫たけもとすみたゆうであつた。住太夫

はお園の胆気たんきと、語り口の奥床おくゆかしいのに打込んで、これこそ我が相續をさせる者が見つ

かつたと悦よろこんだ。もとより男の子だとばかり信じてしまったので、何でも養子に貰もらいたい

とお勝を困らせたが、女だと分ると非常に失望して悔くやしがった。けれどもそれから心

を入れて教え導ななつびいた。それも七歳のこと。

お園は明治八年の六月の生れで、初夏の、澆刺はつらつとした生れだちである。養母のお勝も

気が勝っている、その上に、女中がわりに人形操あやつりの山本三の助というものの母親がいた。

その女が東京へ出ることになつたおり、お園親子にも上京を勧めた。それが綾之助となる

動機——振りだして、お園が十一歳しりあいのりのことである。日本橋久松町に住む近親をたよ

つてゆくと、その人が知しり己あを招いてお園の浄しりるりを聞かせた。それが東京での封切りで

あつた。その折、市村座の座主がお園に目をつけ説しりきすすめて、芸の人として立たせる第

一步の導きをしたのである。お園は竹本玉之助となり、浅草猿若町の文楽座に現われることになった。真打ちはその頃の大看板竹本京枝であった。

明治十八年——世にいう鹿鳴館時代である。上下挙つて西洋心酔となり、何事にも改良熱が充満していた。京枝一座も御多分に洩れず、洋装で椅子にかけ卓にむかつて義太夫を語つた。そんな変ちきな容も流行といえ、滑稽には見えず、かえつて時流に投じたものか連日連夜の客止めの盛況であつた。が、勇みたつた玉之助のお園の初目見得は、思いがけぬ妬みを買つた。京枝の弟子の竹子は、かなりの人気者であつたが、玉之助が出現して、麒麟児の名を博してからは、月に光りを奪われた糠星のように影が薄くなつてしまつた。それかあらぬかこの大入りの興行が、突然何の打合せもなしに、狼藉ふためいて興行主から中止されてしまつた。それは太夫元がふと恐しい密謀を洩れ聞いたので、前途のある玉之助のために、実入りのよい興行を閉場てしまつたのであつた。それは、その日の玉之助の高座に用いる湯呑のなかへ、水銀を白湯にまぜておくという秘密を知つたからだつた。

そんな事がかえつて玉之助の名を高く揚げさせた。玉之助は子供心にも師に附かなけれ

ばならないと考え、故人綾瀬太夫のもとへ弟子入りをした。何という名を与えようかと師匠が考えているうちに、お園は自分で綾之助と名附けたと言出した。このまけぬ気の腕白者は、出京早々から肩を入れてくれた久松町の医者某が、大連たいれんを催してくれた夜に、語りものの「鎌倉三代記」を絶句して高座に泣伏してしまった。全く彼女の記憶力は強かったので、彼女は無本むほんで語り通していたのであった。

十二歳の春には、もはや真打しんうちとなるだけの力と人気とを綾之助は集めてしまった。綾之助のかかる席の、近所の同業者は、八丁饑饉きんといつてあきらめたほどであった。新川しんかわのある酒問屋の主人は鼻屑ひしきのあまり、鉄道馬車へ広告することを案じた。それも多くの人目をあつめたに違いなかつたが、初真打はつ綾之助に贈られた高座の後幕うしろまくは、とうてい張りきれぬほどの数であつたので、幾枚も幾枚も振りおとして掛けかえた。役者の似顔絵えぞうしで知られていた絵双紙えぞうしやの、人形町の具足屋ぐそくやでは、「名物人気揃」と題して、人情にんじようば咄なしの名人三遊亭えんちよう円朝えんちようや、大阪初登り越路太夫こしじだゆう（後の摂津大掾せつつのだいじよう）とならべて綾之助の似顔を摺りすだした。

——綾ちゃんは今年十二だが大人おとなも跣足はだしの巧者で真に麒麟児きりんこだね——
この小書きこががつけてあつた。

そうするうちに五分刈の綾之助は稚子鬘ちごまげになった。また男鬘おとこまげになった。十四、十五と花の蒼つぼみは、花の盛りに近づいていった。明治廿三年には十六歳となった。女義界の綾之助は桜にたとえられた。それと同時にこれも売出しの若手に越子こしこは藤の花、やはり男鬘の小土こつと佐は桃の花と呼ばれ、互に妍けんを競い人気を争った。学生の仲間にも鬘ひいきがつくる各党派があつた。綾之助党は三田の慶応義塾と芝の攻玉舎こうぎよくしゃの生徒が牛耳ぎゆううじをとつていた。それが今日の堂摺連どうするれんの元祖である。

聞くとところによると三田の堂摺連の元祖は、同塾の秀才であつた坂本易徳氏だということである。氏はいまこそ文壇のよたをもつて名が通り、紅蓮洞ぐれんどうの名は名物とされているが、狷介不羈けんかいふき、世を拗すねたぐれさん以前にも、新派劇、女優劇と、何処の芝居の楽屋にも姿を現す、後日の素質は含蓄されていたものと見えて、この人が綾之助を三田党の随喜か渴かつ仰つじょうの的に推称したということである。すれば、綾之助には紅蓮洞氏が結ぶの神でなくてはならない。恋人であり夫である石井健太氏は、紅蓮洞氏が率いた三田党の出身であるから——けれど、ぐれさんに言わせれば「三田の堂摺どうするではない、俺われは天下の堂摺だ」と大語するかも知れない。

堂摺連は自分たちが推称する女王のかかる席へは、道を遠しとせず出かける。雨も、雪

も、熱血漢の血を冷すには足りない。懐ふところのさびしいのは隊を組んで歩いて廻る。もすこし熱狂に近いのは女王の車へ随従して車で乗廻す。それよりも激しいのは人力車くるまの轆ながえにつかまったり後押しをしたり、前へ立って駈出していったりする。高座に渴仰の的が姿を現わすと、神妙に静まりかえつて、邪魔にならぬほどのよい機おりを見て、語り物の乗りにあわせて、下足げそく札で拍子をととり、ドウスル、ドウスルと連発する。けれどもそういう連中は割合に淡泊であつた。

綾之助の人気は絶頂ともいってよいほどに、彼女が十八、九になると満都に響きわたつた。いうまでもなく彼女の人気は平民的で広がった。名高い芸妓などの名は、きいていても青年が眺める花ではないが、綾之助の場合は気楽で、そして語りものを通して一種の親しみをもつことが出来る。それが彼女のために日に日に新らしい信徒をむかえたのもあつたろう。そうになると勢い綾之助には迷惑な殉教徒が出てきた。彼女に熱心のあまり免職される若い巡查もあれば、母親の留守に自殺しようとした小心の書生もあつた。その他にも切腹しかけた人があつて、その人の母親は悴せがれのために綾之助に懇談を申入れたことさえあつた。ある三十男は気が変になつて、いつも赤いハンケチを持ち、句におい袋ぶくろをさげ綾之助の後について歩いた。その人はいつも五行本の書風に真似まね、文句も浄るり節ぶしの手

紙を、半年のうちに百數十通おくった。

綾之助の夫石井健太は、まだ三田に在塾のころ、十二歳からの彼女の姿を知っていた。卒業の後三田のち 聖ひじりぎ 坂に一戸をかまえて、横浜のある貿易商につとめていた。石井氏が綾之助を愛いとしんだのは、恋ではなかったが、綾之助は世よこ心ころがつくにしたがって、この人にこそと思いそめたのであった。綾之助が十九の春は、彼女にとって忘れかねる、匂いこまやかな霞かすみの夜であつたろう。廿六の彼は、初めて彼女の志を入れ、終世を共にする誓ちかを結んだのだが、成恋の二人の間には、惨いたしい失恋の人があつて、その人の誠まご心ころが綾之助の幸福のために仲人となつてくれたのだつた。

その人は石井氏の友達の弟であつた。綾之助を恋したために落第も二、三度した。机の上の洋燈ランプの笠かさには彼女の名が黒々と書かれ、畳の上に頭をかかえて転ころげ廻る彼は、

「日本中の者が死んで、俺おれと彼女と二人ぎりになればよい」

と眩つぶやくらしていた。ある夜、石井氏と一緒に綾之助のかかる席へゆくと、綾之助は石井氏を木戸口に待ち迎えていて、氏の好みを聞いてその夜の語りものを改ためたりした。それを見て綾之助の心を悟つた彼は絶望のあまり、冬の夜を一夜、品川海岸をさ迷つていたこともあつた。その死にもしかねぬ彼の恋が綾之助の偽にせ手紙をつくつて石井氏の心ためを試

した。

それが二人を結びつける強い綱になったのだった。苦悶は彼をたかめて、綾之助を失意のものにさせまいと、優しい思いやりまでして、彼は石井氏の両親が選んだ娘のあったのを、破約にさせるように骨を折った。そんなことがちらちらと噂に立つと、綾之助の高座へ悪戯いたずらをするものが出来た。石井氏の名を知って害めあやようとする者などもあった。養母の鶴勝を煽おだてるものもあった。石井氏は後日の健全な家庭をつくるためにと、綾之助を慰めておいて、雄々おおおしくも志望を米国へ伸のびしに渡った。綾之助はその留守をどうして暮したのであろう、彼女は派手な芸人の上に、日の出の人気の花形である。あらぬ噂も立つ、またその上に大阪役者の中村芝雀しばじゃく（後に雀右衛門）を従いとこ兄妹にもっていたので、東上のおりには、引幕を遣おくつたり見連けんれんを催したりする、彼女の生活の色彩は、いよいよ華やかであった。けれどそれは表向きだけで、彼女は健太氏の帰朝を一日も長しと待ちわびていた。彼女は未来の夫のために便船ごとに出す手紙を、忙しい間にかかさずに書いた。笑われまいたために学びもした、裁縫などもならった。昔せきじつ日の「男おんな」はすっかり細君かたぎ気質になつていた。

五年ぶりに成功して帰朝した石井氏を、廿三歳の豊麗な彼女が迎えた。養母の鶴勝はそ

の悦びを共にすることを得ず、もはや鬼籍きせきにはいつていた。二人の心は一日も早くも焦燥あせりはしたが、席亭よせ組合の懇願もだしがたく、綾之助の引退は一ヶ年の後に延引のばされた。全くその頃は綾之助が出ると、投げ下足げそくというほど、席亭よせの手が廻りかねる大入はんじょう 繁昌しやう だつた。石井氏が帰つてきてから何よりおかしがられたのは、（取消し屋の綾之助）といわれるほど克明に、制限なく新聞へ載せられる誤聞を、一々取消させないではおかなかつたことだ。

人世あらしの嵐——この二人の上にも、ふと曇つた影がさしたこともあるにはあつたが、それは世間の面白がりみぞが、待ちかまえていた二人の心の溝みぞではなく、愛の結晶の長男を早世させたことと、明治卅三年頃の相場の不況に失敗し、二女をかかえて洗い晒さらしの浴衣ゆかた一枚になつたことだつた。その当時こそ多少陰惨の影はもつて来たものの、かえつて二人の心はびつたりと合あひ、綾之助貞淑の床しい語り草とも残された。卅七、八年の日露戦争じゆつぱいぶごろには、芽を出して、家庭は豊かになつた。綾之助はこのおりこそと木戸銭てぬぐいがわりに手拭てぬぐい二筋じゆつぱいぶずつ客に持つてきてもらう演芸会を開き、二日間に二万本を集め得て恤兵部じゆつぱいぶにおくつた。

時の歩みの早さ、家庭にかくれた綾之助に十年の月日は経つた。四十二年の二月に女義

界の紛擾ふんじょうの仲裁にたつた羽目から、睦むつみ、正義の兩派によらず独立して芸界に再来することになった。時の進むことの早さ、綾之助の堂摺連どうするれんはみんな紳士中産階級以上の人になり、時世の潮流もおしなべて向上した。再起の綾之助の語り口も、以前の浮気な人気ではなく、完まったく価値あるものとして価値附ねうちけられ、真に噛かみわけた人生の味を、期待された。

——大正七年四月——

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1918（大正7）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竹本綾之助

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>